

令和4年度 JACET 中国・四国支部  
春季研究大会研究発表題目&発表要旨

日時：2022年6月4日（土）12:50～14:45

- ・実施方法：遠隔で実施
- ・事務連絡：研究大会への参加申込をされた方にのみ、Zoom 会議に参加するための URL を送らせていただきます。詳細はメールで連絡させていただきます。

(12:50～13:00) 総会 司会 寺嶋健史（松山大学）  
(13:00～13:05) 開会式  
開会の辞 支部長 岩中貴裕（山口県立大学）

研究発表題目

司会 山中英理子（広島国際大学）  
(13:10～13:35)  
発表1：機械翻訳における日英の複数性をめぐる一考察  
(A Consideration on Japanese and English Plurality in Machine Translation)  
西谷工平（就実大学）・中崎崇（京都橘大学）  
(13:40～14:05)  
発表2：英語の授業動画の視聴に対する小学校教師志望の学生の態度 — 期待価値理論の視点から—  
(Attitudes of Students Aspiring to Become Elementary School Teachers Toward Watching English Lesson Videos: Based on Expectancy Value Theory)  
藤居真路（金沢学院大学）  
(14:10～14:35)  
発表3：CLIL は日本が起源であることの仮説検証  
(Examining the Hypothesis that CLIL Originated in Japan)  
二五義博（山口学芸大学）  
(14:40～14:45) 閉会式  
閉会の辞 副支部長 高橋俊章（山口大学）

## 研究発表要旨

発表1：機械翻訳における日英の複数性をめぐる一考察

(A Consideration on Japanese and English Plurality in Machine Translation)

西谷工平（就実大学）・中崎崇（京都橘大学）

本研究では、近年急速に精度を上げ、一般に広く普及しつつある機械翻訳を使用した、日本語から英語への翻訳における名詞の複数性の再現について、おもに言語学的観点からその問題点と対応策を検討する。概して、日本語を母語とする英語学習者は複数の“-s”を欠落させる傾向にあり、名詞が、総称、不定の複数を表す場合や、複数マーカーと共起する場合、中・上級英語学習者であっても“-s”を欠落させる（cf. 西谷・中崎, 2022）。機械翻訳を使用した場合、このように取り扱いが難しい複数性がどの程度まで再現されるのかを、名詞の種類および総称、不定の複数、複数マーカーの観点から検証した。結果として、検証した範囲内では、名詞が総称を表す場合と複数マーカーと共起する場合は、その複数性が正確に再現された。他方、名詞が不定の複数を表す場合は、複数性の再現にブレが見受けられた。これらを踏まえ、名詞が不定の複数を表す場合については、敢えて複数性を明示する表現を併用する必要があること、その判断には人間の介入が必要であることを指摘する。同時に、英語学習者が機械翻訳を使用するには相応の英語力と日本語力が必要であり、言語的差異を意識化するような指導を通して、機械翻訳にできること、できないことを学習者に理解させるような指導が必要だと指摘する（cf. 井佐原, 2019; 川添, 2019a & 2019b; 蔵屋, 2019）。

発表2：英語の授業動画の視聴に対する小学校教師志望の学生の態度 — 期待価値理論の視点から—

(Attitudes of Students Aspiring to Become Elementary School Teachers Toward Watching English Lesson Videos: Based on Expectancy Value Theory)

藤居真路（金沢学院大学）

小学校において英語教育への深い理解を持ち、高い英語力を持った教師が求められている。こうした状況に対する認識は、小学校教師を志望する学生の英語教育に関する動画視聴ビデオでの学びの態度に影響していると考えられる。

本研究は、小学校における基本的な認識の相違が英語教育における動画視聴の学びの場面での態度の違いとどのような関係にあるのか、期待価値の考え方をもとに調べることを目的として実施した。

研究方法は、下記の通りである。まず、小学校教師を希望する学生に、英語授業の動画を視聴させた。その際、小学校の英語に対する社会情勢の認識が、動画の視聴に対する課題価値、コスト等との関係について質問紙調査を実施した。

英語授業動画の視聴に対する課題価値およびコストについて適当な測定尺度が見当たらなかったため、新たに尺度構成を行った。また、英語授業の動画に関する学びについても、適当な測定尺度が見当たらなかったため、新たに尺度構成を行った。

これらの関係について相関分析法を用いて分析を行った。その結果、小学校教師を志望する学生の特徴の一面が明らかになった。その結果について発表したい。

### 発表3：CLILは日本が起源であることの仮説検証

#### (Examining the Hypothesis that CLIL Originated in Japan)

二五義博（山口学芸大学）

CLILは1990年代のヨーロッパに起源を持つとされ、日本でCLILの授業をデザインする際にも、海外の先進的とされる実践例から学ぼうとするものが多いが、発表者は、日本の過去から学ぼうという態度を欠いているのが大きな問題点と考えている。CLILという用語は使用していないにせよ、日本の過去の英語教育に同様の実践例は本当になかったのか。

そこで本研究では、CLILは1990年代のヨーロッパに始まったのではなく、明治時代の日本に起源をもつという大胆な仮説を提唱し、2つの視点からその仮説の検証を行っていくこととする。第1は、明治時代の小学校用国定英語教科書である文部省著『小学校用文部省英語読本』全3巻（明治41～43年）において、算数（足し算、引き算、掛け算、割り算）、理科（昆虫や動植物の特徴、天体）、社会科（国旗、日本や世界の地理）、図画（色の配合）や体育（スポーツの説明）などのCLILの要素が多く見られることを明らかにする。第2は、明治時代にはすでにCLILに基づく英語教育論がいくつか展開されていたことを明らかにする。例えば、杵田與惣之助は、『英語教授法綱要』（明治42年）及び『英語教授法集成』（昭和3年）において、英語科と他教科との関係がいかに重要であることを述べている。

本発表においては、主として歴史の視点から、国定英語教科書や英語教授法書の分析を通して、CLILについては海外からだけでなく日本の過去からも学ぶべき点が多いことを示唆したい。